

博士學位論文要約

論文題目： 多様な異文化の民俗に学ぶ環境教育
—都市住民における「人間と自然の関係性」の捉え方—
氏名： 飯塚 宜子

要約：

本研究は、環境問題の解決を目指す環境教育において、世界の多様な民俗への学びを導入することによって、教育方法を刷新し、より大きな教育効果を得る手法を探求することを目的とするものである。

環境教育の教材となる「地域」を選定し、その多様な民俗における環境観、そしてその自然と共にある暮らし方を取りあげ、それをワークショップ型のアクティブラーニング手法によって効果的に学ぶ環境教育プログラムとして開発する。そして、近代都市生活の中で育った日本の若年世代を対象とし実践を行い、教育効果を測りながら改善を試みる。これらを通じて多様な民俗に学ぶ本環境教育方法の可能性と課題を明らかにしていく。

「プログラム内容」は、(1)自然を利用し続けることができる仕組み、(2)都市と異なる自然観や動物観、(3)自然環境を媒介とする人間関係、という三点を網羅していくこととした。

紹介する民俗の担い手は、北米先住民クリンギット、カメルーンのバカピグミー、モンゴル遊牧民という三者とした。日本の学習者が自らの経験にとらわれる懸念がある農耕を除き、食料保存型狩猟採集(クリンギット)、即時消費型狩猟採集(バカピグミー)、遊牧(モンゴル)という生業の三パターンが、多様な自然生態下において展開される比較的典型的と思われる三者を選定した。

それぞれの暮らしの様子として定位した内容は以下のようなことである。モンゴル遊牧民については、遊牧のありようがそのまま、自然を利用し続ける仕組みとなる。動物は草原の草を食べて生き、遊牧民は動物から乳や肉を得て生きる。草が動物に食べつくされたら、人間も生きることにはできない。育て、殺し、食べるという動物との深い関係性、また食べる対象としてだけではない動物への愛情や敬意、その中で動物を衣食住や道具、燃料などに無駄なく利用する様子、先祖から受け継がれる伝承、子どもたちが家族の生業に携わる様子などもプログラムに導入される。

北米先住民クリンギットにおいては、カナダ政府との交渉にも触れながら、自然生態や動物の習性を良く知り、狩猟採集を重要な行為とし、動物霊への儀礼をおこなう様子などを紹介する。二つのクランはワタリガラス(raven)とオオカミ(wolf)というトーテム動物に象徴され、それぞれ、動物と人間がもともとは同じものという初源的同一性とも関連づけられる。動物の主体性を認める考え方や、人間は自然世界の内側の存在として自然全体と関わるという存在様式や思考形式も顕著に認められる。二つのクランに分かれながら全体性が保たれる人間関係、共同作業、共同体外の他者の歓迎なども紹介される。

バカピグミーは伝統的に、食料保存を行わない即時消費型狩猟を行う。熱帯雨林に生息する多様な動植物、摂食・分配適正量を獲る習性、タブー食物、人間と動物の同一視、超自然的存在との日常的共存などが紹介される。ゴリラとゾウは特に重要な動物であり、あらゆる自然物に魂を認め、夕方になると即興的に声を重ねていく歌を歌い、踊り、森からジェンギなど力のある精霊を呼ぶ。豊饒な森に畏敬をもち、狩猟物を平等に分配し、子どもを共に育てあう。また近年の野生動物の商品化による環境劣化の様子なども紹介する。

本稿では、これらの三つのプログラムによる四つの実践事例を取り上げ分析した。本実践研究

では、学習者が生成したテキストを貴重な成果と位置づける。分析については質的内容分析のコーディング手法を採用した。自由に記述されたテキストをコード化し、カテゴリ分類することにより、学習者による学びの概要が抽出された。分類の最上位階層に現れた異文化受容—自身の相対化—自然観の発見というコードの思考プロセスはすべての事例について同様だった。

分析の結果、学習者らは、三つの地域それぞれの「自然の一部である人間のあり方」、「生かされ方」の多様性やその生活世界の特徴を捉えることが可能であったことが明らかとなった。また、その多様性の学びの中から、学習者らに「共通する気づき」があった。「いのちを食べる」「自然から食を獲得する」「自然の再生可能範囲内の暮らし」「自然と人間の繋がり」の自明性」「世代を超えた人間のつながり」、といった、普遍的なものとしての類型が見いだされたのである。そして、その類型は、一部の子どもたちにはあるが、「都市の自分ともつながること」として認識されていった。

現代の都市においては、人間にとって自然は切り離され、遠くにあるものと認識される。そのつながりの再構築が課題となっている。ところが、民俗の生きる多くの世界においては、人間は自然の内側に存在し、自然とのつながりは自明のこととされている様子が認められる。持続可能性、つながり、環境倫理、存在の豊かさなどは、現代都市においては学習目標として掲げられるが、それらは、民俗の生きる多くの世界においては、「生きられるもの」である。そのような「生き方」を現代都市住民が捉え、自らの生き方や自然の捉え方を省み、新たな自然観や世界観に拓かれる学びが、一部の学習者により可能となった。

このような学びを可能とする「方法論」が必要である。その要件は次の五項目であった。

① 対象とともにある場

ファシリテーターや学習者が、モンゴル遊牧民ら対象者と共にある、水平な場に位置づけることが挙げられる。話し合う時間のみならず、知識導入の部分にもワークショップの場づくりの方法論を用いる手法といえる。

② 主人公の設定：生活世界の全体性の提示

対象者と同様に観察者が主観を働かせる「間主観性」により、同じ主観的体験が他者との間で共有されることが可能になる。学習者の間主観性が働くよう、主人公という対象者を設定した。

③ 非言語的の手がかり

写真、動画、音楽、モノなど非言語的な手がかりは、暗黙知を伝える大きな助けとなる可能性がある。

④ プロセスの重視

学習者が意味を生成していくプロセス自体が、最も重要な学びと捉える。

⑤ 表現し学びあう時間

学習者が、新たな知識を自分に関連づけた考察を表現する時間を確保する。具体的には話す、書くなど所謂アクティブラーニング手法となる。表現を触発する問いかけは重要である。

以下の四項目は、学習者の興味や学びをさらに深めるために有効な要件である。

⑥ 飲食物の試食・試飲、五感に触れるモノ

非言語的なコミュニケーション要素として、より直接的に体験し体感できるモノ、つまり食べる、飲む、触れる、使うことなどができるモノの活用も重要である。

⑦ 行為

歩く、移動する、異文化の対象者による日常的行為の模倣などにより、知識理解とは別の所感が学習者に生成されるように思われた。

⑧ 場の見立て

机や椅子を並べる教室型よりも、ゾーニングで見立てられた場にモノを配置するなどは、学習者

が場に位置づくことを助けるようである。

⑨ 対象者の価値観の可視化

主人公となる対象者が撮影した「大切なものの写真」の明示など、対象者の価値観を明確に知ることの効果は高い様子が窺われた。

これらの方法論により、学習者による「自分の目で世界を見る」、「他者やものごとの存在の受けとめを優先する」、「日常の当たり前が揺らぐ」といった、場の生成が可能となった。これにより、民俗が生きる生活世界を、学習者が内在的・体験的に知ることが可能になったのである。この方法論が、ある一定の程度であっても、フィールドワークと同様の効果を生み出したことは、学習者に、受容—相対化—発見や変化という思考プロセスが、すべての事例において生成したことにより、実証されたと考えてよいと思われる。

本実践研究で述べられてきた「新たな自然の捉え方」「捉えなおし」が意味しているのは、「内在的な捉え方」である。内在的な捉え方とは、他者や自然を二項対立ではなく、自分ごととして捉える道徳的な見方といえる。この内在的な捉え方の中において、都市住民は、社会—経済—文化—宗教のリンクの切れない生活世界を体験し、新たな発見をなしていった。学習者たちは、互いに前提としている現実認識やこれまでの常識を共有しあい、共通体験を行い、そこで捉えた自然観・世界観や、新たな発見を確かめ合うことが出来た。ある限られた時間と空間の中とはいえ、新たな認識が構成されたのである。

このように、他者とその文化の基底から内在的に捉える体験は、「違うけれど同じ」という同類共感や、ともにある喜びといった感受性を、学習者の中に育む様子が認められた。このような感覚は、水や大気や資源を分かち合う環境の学びにとどまらず、それぞれの生き方や世界観を尊重するという視座における社会的公正の学びや、多文化共生、平等、平和、人権などの学びに結びつく。この意味において、多様な民俗に学ぶ環境教育は、「本来的な ESD(持続可能性のための教育)の学び」となる可能性が高いものである。

課題としてプログラムにおける ① 民俗の捉え方 ② 学びの場のプロセス ③ 評価や分析という三点の妥当性について、さらに実証的に明らかにしていかなければならないことを挙げた。

展望として以下の四点を述べた。①民俗の生きる世界を都市住民が内在的に学ぶことを可能にする方法論の提示と実践の広がり、環境教育のイノベーションであると同時に、人類学や民俗学を社会に開いていくイノベーションでもある。② 他の実践との協働に新たな可能性がある。③日本と海外のフィールドをつなぎ、互いの生き方を考えていく可能性に開かれている。④筆者のキャリアデザインと一体のものとして、社会に開いた協働型の組織を発展させていくことにより、新しい公共の場を生み出し、社会的価値の創造につなげていくという展望を述べた。